

原著

## 看護学生の社会的スキルと自己効力感に関する研究

小田日出子\* 焼山 和憲\*\* 中馬 成子\*\*  
 藤野 成美\*\*\* 井手 裕子\*\*\* 脇崎 裕子\*\*\* 太田 祥恵\*\*\*

## 〈要 旨〉

本研究の目的は、看護学生の社会的スキル（以下SSとする）と自己効力感（以下SEとする）の測定及びSSとSEの関連性を明らかにし、教育的介入方法を検討することにある。西南女学院大学保健福祉学部看護学科の学生369名を対象に質問紙調査を実施し、その結果、SS得点の平均値は、4年生を除き、大学生女子のそれより高かった。SSの構成要素別得点では、4年生は6要素とも他の学年より得点が低い傾向にあった。また、ストレス処理のスキルは他の要素よりも得点が低い傾向にあり、ストレスに上手く対処できない学生の姿が明らかとなった。次に、調査対象者全体のSEの平均得点とSEの強さの標準データ（対象は学生）である5段階評定点とを比較してみた。対象者のSEの強さは普通であった。ただし、4年生のSEの平均得点はやはりここでも低く、自己を過小評価する傾向や、課題達成への自信のなさ、取り組みへの不安及び失敗への不安がうかがえた。なお、SSとSEの間には、全学年ともにやや高い相関（ $R.63 \sim R.79$ ）がみられた。

今回の研究により、看護学生のSEの向上や看護に不可欠なSSの獲得にむけては、本学における4年間の看護教育内容の見直しと、効果的な教育方法や指導方略の検討・改善が今後の課題であるとの示唆を得た。

キーワード：看護学生 社会的スキル 自己効力感 看護基礎教育

## I 緒 言

1950年を境にわが国の出生数、合計特殊出生率は急激な下降をたどり、2002年には、合計特殊出生率は過去最低の1.33となった<sup>1)</sup>。少子化が進む中、鳴澤<sup>2)</sup>は、現代の若者は総じて「経験・特に対人関係の経験不足」と「発達に必要なエクス不足」が目立つと指摘する。看護職を志し、看護系大学に学ぶ学生達もその例外ではない。従って、対象者との人間関係を基盤とする看護において、社会的スキル（social skills：以下SSとする）を高め、対人関係能力を獲得することは必要不可欠な課題といえる<sup>3)~8)</sup>。

一方、バンデューラ（Albert Bandura）<sup>9)</sup>は、彼の社会的学習理論（social learning theory）の中で、個人の行動遂行能力に対する確信としての自己効力感（self-efficacy：以下SEとする）を提唱した。彼は、人間行動の決定要因として、先行、結果、認知の3要因を挙げ、中でも、行動の先行要因である予期機能のうちの〈効力予期〉を重視し、自分がどの程度の〈効力予期〉を持っているかを認知した時に、その個人にはSEがあるという。つまり、ある行動を起こす前にその個人が感じる行動遂行可能感、自分がやりたいと思っているこ

との実現可能性に関する知識、あるいは自分にはこのようなことがここまでできるという考えをSEとした<sup>10)</sup>。

本研究は、このSS、SEに注目し、本学看護学生369名のSS及びSEを測定するとともに、SEとSSとの関連を検討し、効果的な教育的介入のあり方について示唆を得ることを目的とした。

本稿で使用する用語について、SSとは広く「他者との関係性や相互作用を円滑に行うための技能・能力」であり、人が「周囲の人々に対して適切に対応し、上手にコミュニケーションを図るために必要とされる対人関係能力を示すもの」とする。また、SEとは「特定の結果を得るために必要な行動を、どの程度うまく行うことができるかという認知」であり、「ある行動を起こす前にその個人が感じる達成感および対処への可能感、自己遂行可能感、ならびに自分はこのようなことがここまでできるという自信や意欲、判断を示すもの」としてとらえる。

\* 西南女学院大学保健福祉学部看護学科教授  
 \*\* 西南女学院大学保健福祉学部看護学科助教授  
 \*\*\* 西南女学院大学保健福祉学部看護学科助手

## II 研究方法

### 1. 調査対象者と調査方法

調査対象者は、本学保健福祉学部看護学科に在籍する1～4年次の学生369名で、2002年4月及び6月に、学年ごとに無記名による自己記入式質問紙調査を実施した。

2、3及び4年次の学生については、新学期開始直後の学年オリエンテーション終了後の空き時間を利用して調査紙を配布、その場で直接回収した。

1年次の学生については、入学オリエンテーションやフレッシュキャンプなど、入学後の主な学校行事を終え、新しい環境にも多少慣れた6月上旬に同様の調査を実施した。

### 2. 測定用具

#### 1) 社会的スキル尺度

SSの測定には、先行研究によりその有用性が認められた「菊地の社会的スキル尺度 (Kikuchi's Social Skill

Scale・18項目版, 1988)」<sup>11)</sup> (以下KiSS - 18とする) を用いた。KiSS - 18は、若者にとって必要なSS、すなわち「初歩的なスキル」「高度のスキル」「感情処理のスキル」「攻撃に代わるスキル」「ストレス処理のスキル」「計画のスキル」の6要素を含み、各要素に3項目ずつ合計18の質問項目からなる。回答者はそれら質問項目に5段階評定法で回答する (KiSS - 18: 質問項目は資料1参照)。

#### 2) 一般性自己効力感尺度

SEの測定には、坂野と東條<sup>12)</sup>による「一般性セルフエフィカシー尺度 (General Self-Efficacy Scale), 1986」 (以下GSESとする) を使用。GSESは、個人が一般的にSEをどの程度高くあるいは低く認知する傾向にあるかという、一般的なSEの強さを測定するためのものであり、「行動の積極性」「失敗に対する不安」「能力の社会的位置づけ」の3因子で構成される。質問は、SEが高く認知された時の行動特徴を含む内容が合計16項目準備されており、2件法で回答する (GSES: 質問項目は資料2参照)。

### 資料1 社会的スキル尺度: KiSS - 18 (18項目)

以下に18の項目があります。各項目を読んで、今のあなたにあてはまるかどうかを判断してください。そして、次の

5. いつもそうだ
4. たいていそうだ
3. どちらともいえない
2. たいていそうでない
1. いつもそうでない

の5つの選択肢のうちから、あてはまるものの番号どれか1つを○で囲んでください。あまり難しく考えず、感じたままに答えてください。

1. 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。	5	4	3	2	1
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。	5	4	3	2	1
3. 他人を助けることを上手にやれますか。	5	4	3	2	1
4. 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	5	4	3	2	1
5. 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	5	4	3	2	1
6. まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	5	4	3	2	1
7. こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。	5	4	3	2	1
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。	5	4	3	2	1
9. 仕事をするとき、何をどうやったらよいか決めることができますか。	5	4	3	2	1
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。	5	4	3	2	1
11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。	5	4	3	2	1
12. 仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。	5	4	3	2	1
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。	5	4	3	2	1
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。	5	4	3	2	1
15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。	5	4	3	2	1
16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。	5	4	3	2	1
17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっているにもかかわらず、うまくやっていくことができますか。	5	4	3	2	1
18. 仕事の目標を立てるのに、あまり困惑を感じないほうですか。	5	4	3	2	1

## 資料2 一般性自己効力感尺度：GSES（16項目）

以下に16の項目があります。各項目を読んで、今のあなたにあてはまるかどうかを判断してください。そして、あてはまる場合には「はい」、あてはまらない場合には「いいえ」を○で囲んでください。どちらが正しいということではありませんので、あまり難しく考えずにありのままに答えてください。

- |  |    |     |
|--|----|-----|
| 1. 何か仕事をするときは、自信をもってやるほうである。             | はい | いいえ |
| 2. 過去に犯した失敗やいやな経験を思い出して、暗い気持ちになることがよくある。 | はい | いいえ |
| 3. 友人よりすぐれた能力がある。                        | はい | いいえ |
| 4. 仕事を終えた後、失敗したと感じることのほうが多い。             | はい | いいえ |
| 5. 人と比べて心配性なほうである。                       | はい | いいえ |
| 6. 何かを決めるとき、迷わず決定するほうである。                | はい | いいえ |
| 7. 何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い。     | はい | いいえ |
| 8. 引っ込み思案なほうだと思う。                        | はい | いいえ |
| 9. 人より記憶力がよいほうである。                       | はい | いいえ |
| 10. 結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでゆくほうだと思う。   | はい | いいえ |
| 11. どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある。    | はい | いいえ |
| 12. 友人よりも特にすぐれた知識をもっている分野がある。            | はい | いいえ |
| 13. どんなことでも積極的にこなすほうである。                 | はい | いいえ |
| 14. 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである。              | はい | いいえ |
| 15. 積極的に活動するのは、にがてなほうである。                | はい | いいえ |
| 16. 世の中に貢献できる力があると思う。                    | はい | いいえ |

## 3. 計測方法

得られたデータから基本統計量を算出し、解析は回帰分析の応用である数量化I類で行った。

## 4. 倫理的配慮

調査対象者には、学年毎に事前に調査目的を説明し、調査への参加は強要されるものではなく対象者の自由意思による同意を得て行うものであること、参加しないことによる不利益はいっさい生じないこと、調査によって得られたデータは全てコンピュータ処理とし、回答者が特定できない方法をとることを保証した。

## Ⅲ 結果

調査紙の有効回答者数（回収率）は、1年生96名（93.2%）、2年生109名（98.2%）、3年生77名（84.6%）及び4年生54名（84.4%）であった。平均年齢は、1年生18.49歳、2年生19.28歳、3年生20.33歳及び4年生21.39歳である。

以下、SS、SEの順に結果を述べる。なお、結果の詳細は表1、表2及び表3に示す。

## 1) 社会的スキル

菊地<sup>13)</sup>によれば、大学生女子のSS平均値58.35（SD 9.02）である。これに対し、対象者のSS平均値は1年生59.69（SD 9.29）、2年生61.03（SD 10.79）、3年生61.13（SD 9.26）及び4年生57.52（SD 11.86）で、

4年生を除き、他は大学生女子より平均値が高かった。各学年の平均値と大学生女子の平均値の差についてのt検定の結果は、2年生（ $t=-1.9838$ ）と3年生（ $t=-2.0802$ ）で有意であった（ $p<.05$ ）。

次に、KiSS-18の質問項目を要素ごと6つに区分し、学年別に各項目の平均値（SD）を算出し、値の高低をみた（表1）。全学年とも高度のスキルQ16が高得点であった。次いで、1年生ではストレス処理のスキルQ17と初歩的なスキルQ15の得点が高かった。2年生はQ17と計画のスキルQ18の得点が高かった。3年生は1、2年生とほぼ同様の結果であった。4年生は初歩的なスキルQ1や感情処理のスキルQ4の得点が高かった。

一方、得点が最も低かったのは、3年生を除き、ストレス処理のスキルQ11であった。3年生は攻撃に代わるスキルQ8の得点が最低で、次にQ11であった。1、2年生では高度のスキルQ10が、4年生では計画のスキルQ12が2番目に得点の低い項目であった。

## 2) 一般性自己効力感

坂野と東條<sup>12)</sup>によれば、標準データ（対象は学生）の平均値6.58（SD3.70）、最大値15、最小値0である。対象者の場合、全体の平均値7.35（SD2.33）、最大値12、最小値1で、これをGSES 5段階評定値<sup>14)</sup>で見ると、対象者は評定値5～8に該当し、学年による多少の差はあるものの、全体としてのSEの程度は「普通」の強さに相当した（表2）。

表3で示した数量化I類の計測結果について、1年

生はX15(-3.2304)、X7(-2.0981)及びX9(2.0097)の3項目、2年生はX8(-2.0802)、X3(2.1390)の2項目、4年生はX8(-2.1192)の1項目が統計的に有意であった ( $p < .05$ 及び $p < .25$ )。

3因子別では、1年生は「能力の社会的位置づけ」(以下第3因子という)のX9、X12などが正の値、「行動の積極性」(以下第1因子という)を特徴づけるX15及び「失敗に対する不安」(以下第2因子という)のX2、X7などが負の値であった。2年生は第3因子のX3、X9、X16などが正の値、第1因子のX8、X15及び第2

因子のX7、X11などが負の値であった。3年生は第3因子のX12と第1因子のX5などが正の値、第2因子のX4、X2などが負の値であった。4年生は第1因子のX6、X10、X13及び第3因子のX16などが正の値、第1因子のX8、第2因子のX2及び第3因子のX12などが負の値であった。特に第1因子のX8は、全学年で最も大きな数値(-10.0760)であった。

次いで、SEとSSの相関をみるために、各学年別に重相関係数(R)を求めた。1年生(R.71)、2年生(R.68)、3年生(R.63)及び4年生(R.79)であった。

表1 社会的スキルの区分別・学年別得点

社会的スキル(KISS-18) 区分 (質問項目)		1年生		2年生		3年生		4年生	
		平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差
初歩的な スキルの	Q1 他人と話していて、あまり会話がとぎれないほうである。	3.31	0.83	3.45	1.05	3.47	0.88	3.46	0.88
	Q5 知らない人とも、すぐに会話が始められる。	3.29	1.16	3.28	1.21	3.23	1.16	3.24	1.39
	Q15 初対面の人に、自己紹介が上手にできる。	3.53	1.12	3.40	0.98	3.65	0.95	3.32	1.03
高スキルの	Q2 他人にやってもらいたいことをうまく指示することができる。	3.29	0.78	3.28	1.02	3.39	0.82	2.98	0.97
	Q10 他人が話しているところに、気軽に参加できる。	3.03	1.03	3.11	0.99	3.18	1.08	3.00	0.96
	Q16 何か失敗したときに、すぐにあやまることができる。	4.03	0.97	4.00	0.89	4.09	0.89	3.78	0.83
感情スキルの	Q4 相手は怒っているときに、うまくなだめることができる。	3.27	0.97	3.49	0.86	3.42	0.86	3.43	0.96
	Q7 こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できる。	3.03	0.87	3.15	0.81	3.14	0.88	2.83	0.90
	Q13 自分の感情や気持ちを、素直に表現できる。	3.49	1.02	3.55	0.96	3.55	1.00	3.32	1.14
代わりの スキルに	Q3 他人を助けることを、上手にやることができる。	3.34	0.80	3.55	0.86	3.53	0.73	3.24	0.90
	Q6 まわりの人たちとの間でトラブルが起きてても、それを上手に処理できる。	3.21	0.85	3.21	0.88	3.14	0.82	3.13	1.00
	Q8 気まずいことがあった相手と上手に和解できる。	3.28	1.03	3.19	1.02	3.07	0.94	3.04	0.94
スト レス	Q11 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができる。	2.87	0.84	2.98	0.86	3.13	0.96	2.82	0.88
	Q14 あちこちから矛盾した話が伝わってきてても、うまく処理できる。	3.20	0.85	3.37	0.83	3.23	0.75	3.09	1.06
	Q17 まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていける。	3.67	0.94	3.68	0.87	3.61	0.89	3.33	1.04
スキ ル	Q9 学習をするときに何をどうやったらよいか決めることができる。	3.31	0.81	3.50	0.85	3.38	0.72	3.30	0.90
	Q12 学習の上で、どこに問題があるかすくすみにみつけることができる。	3.14	0.76	3.30	0.75	3.36	0.85	2.94	0.91
	Q18 学習の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうである。	3.45	0.92	3.60	0.88	3.47	0.85	3.24	0.92

Table 1 The Scores of Social Skills According to Each School Years and Each Divisions

表2 自己効力感の5段階評定値(坂野, 1989)

自己効力感 得点	5段階評定値				
	1	2	3	4	5
学生	~1	2~4	5~8	9~11	12~
対象者の 平均値	7.35				
自己効力感 の程度	非常に低い	低い傾向 にある	普通	高い傾向 にある	非常に高い

Table 2 5-Stage Rating Scores of GSES  
(According to Sakano, 1989)

表3 因子別・学年別の自己効力感の計測結果

因子	変数(質問項目)	学年			
		1年生 (R <sup>2</sup> 0.5054)	2年生 (R <sup>2</sup> 0.4579)	3年生 (R <sup>2</sup> 0.3991)	4年生 (R <sup>2</sup> 0.6196)
行動の 積極性	X1 何か仕事をするときは、自信をもってやるほうである。	1.9181 [ 1.1279]	2.7334 [ 1.3240]	2.6104 [ 1.1199]	-1.9787 [-0.6147]
	X5 人と比べて心算性がほうである。	-2.5275 [-1.0082]	1.4327 [ 0.6100]	3.1919 [ 1.3876]	3.2558 [ 0.8880]
	X6 何かを決めるとき、迷わず決定するほうである。	-1.7994 [-0.8575]	-0.0508 [-0.0219]	1.6511 [ 0.6580]	6.8767 [ 1.5925]
	X8 引込み思案なほうだと思う。	1.7844 [ 0.7862]	-4.3216 [-2.0802] *	-1.6655 [-0.7575]	-10.0760 [-2.1192] *
	X10 授業の見過しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでゆくほうだと思う。	0.3700 [ 0.2068]	2.1686 [ 0.9933]	2.5350 [ 1.1110]	4.6921 [ 1.4239]
	X13 どんなことでも積極的にこなすほうである。	2.2053 [ 1.1023]	0.5334 [ 0.2577]	1.2965 [ 0.4605]	4.2512 [ 1.1044]
	X15 積極的に活動するのは、にがてなほうである。	-7.4216 [-3.2304] **	-3.6324 [-1.4689]	-1.9924 [-0.7068]	3.0582 [ 0.6672]
	X2 過去に犯した失敗やいやな経験を思い出して悪い気持ちになることがよくある。	-3.9853 [-1.9635]	-0.0586 [-0.0289]	-2.5980 [-1.1089]	-6.0307 [-1.8082]
	X4 仕事を終えた後、失敗したと感じることのほうが多い。	-1.5227 [-0.9096]	0.3588 [ 0.1680]	-2.8079 [-1.2736]	0.6841 [ 0.1835]
	X7 何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い。	-4.4608 [-2.0981] *	-3.4079 [-1.5317]	2.8703 [ 1.1095]	0.0111 [ 0.0029]
不安	X1 何か仕事をするとき、自信をもってやるほうである。	1.9181 [ 1.1279]	2.7334 [ 1.3240]	2.6104 [ 1.1199]	-1.9787 [-0.6147]
	X11 どうやったらよいか決心がつかずに仕事によりかかれないうちがよくある。	-0.2579 [-0.1390]	-3.1352 [-1.4076]	-1.3774 [-0.6431]	-0.5171 [-0.1416]
	X14 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである。	0.9115 [ 0.4347]	-1.8245 [-0.8321]	-1.4725 [-0.5849]	-2.4074 [-0.6333]
	X3 友人よりすぐれた能力がある	-1.1962 [-0.4810]	5.0065 [ 2.1390] *	-0.4207 [-0.1677]	2.5383 [ 0.5091]
	X9 人より記憶力がよいほうである。	4.0236 [ 2.0097] *	3.5484 [ 1.7200]	1.5919 [ 0.6486]	2.4867 [ 0.7542]
	X12 友人より性格にすぐれた知識をもっている分野がある。	3.5745 [ 1.6627]	-2.4079 [-1.1060]	3.2759 [ 1.4414]	-3.4804 [-0.8352]
社会的	X16 世の中に貢献できるかがあると思う。	1.4942 [ 0.8705]	3.0355 [ 1.5577]	1.8458 [ 0.8510]	5.2122 [ 1.4445]

(注1) \* \* 及び \* は、それぞれ0.05%及び0.25%で有意である。

(注2) R<sup>2</sup> は決定係数、[ ]内の数値は回帰係数のt値である。

Table 3 The Measurement Results of Self-Efficacy According to Each School Years and Factors

### Ⅲ 考察

#### 1) 本学看護学生の社会的スキルについて

本学看護学生のうち、4年生を除く3学年のSS得点平均値は、大学生女子のそれを上回っていた。これは、看護学生はSSが比較的高い集団であり、他学部に比べ対人関係に自信を持っている学生が入学してくる傾向がある<sup>3)</sup>や看護学生のSS得点は1年目から高値を示す<sup>4)</sup>とした先行研究に合致する。しかし、他方で1年生のSS得点が高いのは現実的な認知の甘さによる<sup>15)</sup>との報告もあり、本学看護学生のSS得点への影響要因については、さらに具体的な検証が必要と考えている。

次に、4学年中4年生のSS得点が低かった理由について考察する。筆者らは、この変動には本調査の実施時期が影響しているのではないかと推察する。調査当時、4年生は3年次後期～4年次前期の10カ月に渡る臨地実習の途上にあつた。大方の学生は実習全体の約3分の2を終了しており、そこに至るまでに、学生達は、新生児から高齢者までさまざまな看護の対象者と出会い、それを取り巻く保健医療関係者とも種々の関わりを持つ。また、病院や老人保健施設、事業所、訪問看護ステーション、健康管理センター、保健所など、多種多様な施設での実習を体験する。臨地実習とは、看護学生が既習の知識や看護技術をフルに活用し、個々の対象者に応じた看護を計画・実践する場であり、援助者への行動変容が求められる場である。従って、看護学生にとってSSの向上や開発は必要不可欠な課題<sup>16)</sup>といえる。井山ら<sup>17)</sup>は、SSは環境内でのさまざまな強化による、いわば自然に獲得されていくものであり、臨地実習においては、患者・家族や多くの保健医療関係者と交わり、反応を確かめ人間関係を深めながら学習していく過程、つまり、臨地実習そのものがSSのトレーニングであると述べた。しかし、臨地実習には看護学生が自信を得る体験と自信を失う体験の両方が混在しており、それぞれの体験の積み重ねの中でSSの向上や援助者への行動変容が齎されるとはいえ、人間相互接触の減少や対人関係の希薄化が懸念される今日、看護学生と雖も日常の対人関係の経験不足は否めず、さらに看護場面での対人行動となると一層その蓄積はなく、対人技能にも習熟していないなど、これら複数の要因が負の影響をもたらし、結果として4年生のSS得点を低めたのではないかと考える。

次に、SSの6要素については、どの学年もQ16〔失敗した時の陳謝〕が高値を示した。1～3年生ではQ17〔他者との協調〕、Q15〔自己紹介〕がそれに続く。Q15、

Q16は初歩的スキルと高度のスキルを表す項目であるが、これら2要素の項目群は相対的に値が高かった。菊地・堀毛ら<sup>18)</sup>は、SSの基本となるスキルとして、聞く、会話を始める、会話を続ける、質問する、自己紹介する、お礼をいう、敬意を表わす、謝る、などを挙げ、日常、他者と接する際にこれら基本のスキルがうまく使用できていれば対人関係に問題は生じず、他者との関係はスムーズにいくと述べた。比較的SSが高い集団とされる看護学生としては、1～3年生の結果も肯ける。4年生はQ4〔感情処理のスキル〕が高かった。これは、臨地実習でのさまざまな体験から、友人や先輩・後輩あるいは教員との限られた関係とは別の多種多様な人々との対人関係を学習することによって、それにうまく適応する新たなSSを獲得し、対人関係を円滑に進める感情表現がスムーズに行えるようになったためではないかと考える。しかし、Q11〔非難の処理〕、Q7〔関係不安の処理〕などストレス処理や攻撃処理の得点は低く、野崎<sup>3)</sup>、道重<sup>5)</sup>、井山<sup>17)</sup>らの報告にもあるように、対人プロセスにおけるストレス対処能力の不足が窺われた。以上より、本学看護学生への教育的介入として、対人関係が円滑にいかない場合のストレス対処能力を育てること、状況を冷静に判断し問題解決するための適切な対処能力を養うこと、特に実習初期の対人不安を軽減する意味においては、自己開示に向けた主張性スキルの強化を図る具体的な方策が必要と思われた。

看護は、患者と看護者との対人関係を基盤として行われる。対人行動の蓄積が少なく社会生活上必要なSSの習得にも不足のある看護学生が、ペプロウ(Hildegard E. Peplau)<sup>19)</sup>のいう〈有意義な、治療的な、対人的プロセス〉を展開し、対象者のよりよい健康を旨とする患者－看護師間の治療的対人関係を確立するのは容易なことではない。そこでは、日常的な対人技能とは別の、看護における対人関係を円滑にする技能・能力の獲得が必要不可欠であり、このことは、後述するSEの向上とも併せて、看護基礎教育における社会的スキル訓練(social skills training: 以下SSTという)の必要性を示唆するものと考えている。ただ、SSTに関する研究は未だ少なく、現時点でその必要性を明解な根拠とともに論じることはできないが、看護学生が将来看護専門職にふさわしいSSを発揮するについては、看護基礎教育段階での看護学生のSS強化は重要な課題の1つであり、その具体策の検討や実施に向けたプランの作成が急ぎ求められているように思う。

## 2) 本学看護学生のSEについて

はじめに、測定結果にみる決定係数 ( $R^2$ ) は、いずれの学年も小さい値であるが、これは測定に用いたデータが0・1のデジタルデータによる分析の結果と思われる。それぞれの変数の測定結果からみて、理論的整合性はあると思われる。

SE得点平均値より、対象者のSEの強さは「普通」であった(表2)。このSEの強さによって、日常行動にはどのような違いがみられるのか。坂野・東條<sup>12)</sup>によれば、第1因子は、SEが高いほど行動傾向は積極的で、課題達成のために大きな努力を払い、反対に低いほど消極的になることを意味する。第2因子は、SEが高ければ過去の失敗にとらわれず、低ければ過去の失敗経験にこだわり不安あるいは憂鬱な気持ちになる傾向が強いことを意味する。第3因子は、SEが高いほど社会的な場面に関連して自分自身に高い評価を与えることを意味する。要するに、SEと積極的・意欲的な行動傾向とは密接に関係しており、SEが高い人は、失敗にとらわれることなくあらゆることに積極的・意欲的で、自信をもって取り組むことができるが、反対にSEが低い人は、たとえ能力があっても何事にも自信をもって臨むことができず、些細な失敗でもその失敗経験にとらわれて不安になり、積極的・意欲的な行動をとることができないというのである。ここで、坂野・東條<sup>12)</sup>及び高沢ら<sup>20)</sup>の見解をもとに、学年別に対象者のSEを概説する。1年生はSE得点7.76(SD 2.20)と4学年中最も高値であった。また、SEを構成する3因子のうち、第3因子を特徴づけるX9とX12が正、第1因子を特徴づけるX15と第2因子を特徴づけるX2、X7が負の値であったことから、1年生は学業面での自己評価が高く、失敗に対する不安も少ないので、積極的に活動することをあまり苦にしない傾向にあると思われる。ただし、第1因子の他の変数X1、X6、X10にさほどの変化がないことから、SEの大きさ(magnitude、水準とも呼ぶ)は未だ十分ではないと思われ、従って、看護に関わる特定の行動を難易度の順に並べた時、入学直後のこの段階で高次の問題解決が可能な見通しをもつことはできないと思われた。2年生のSE得点7.11(SD 2.57)は対象者の全体平均値を下回り、4学年中最も低値であった。4年生も7.17(SD 2.46)と2年生に次いで低かった。しかし、全体のSE得点の程度が「普通」に相当することから、3年生の結果も含め、これによる問題は無いと考えている。

SEを構成する3因子については、2年生も1年生と同じく社会的場面での自己評価が高く、また、第1因

子のX8が負、第3因子のX3が正の値を示していることやその変化は統計的に有意であることから、1年生以上に積極的に行動でき、自分自身の力にも多少自信をもっていると思われた。さらに、1年生に比べて課題達成に向けた努力も払えるようになってきている。ただ、本調査は学年間の横断的調査であり、各学年のSEの変化を学年進行に伴うSEの変化としては捉えられないため、こうした年次毎のSEの変化を把握するためにも、次年度から継続的な縦断的調査の実施を検討している。

3年生は、第1因子のX5と第3因子のX12が正、第2因子のX4が負の値を示すことから、他者よりすぐれた知識分野があるとの自負はあるものの、学年の傾向としてやや心配性であり、失敗に対する多少の不安を抱いている。しかし、行動は積極的で意欲もあり、課題達成への自信ももっていると思われた。4年生は、第1因子がX1、X8を除きすべて正、中でもX6、X10、X13の値が高く、第3因子のX16もX6に次いで高値であった。一方、第1因子のX1、X8と第2因子のX2及び第3因子のX12は負の値を示し、特に、X8は4学年中最も大きな負の値であった。これらより、4年生は積極的・意欲的に行動でき、自らも社会貢献できる力をもつと認識しているにもかかわらず、人に比べて心配性と思ったり、自分は他者より劣っていると自己を過小評価したりする傾向にあり、そのことが課題達成への自信のなさ、取り組みへの不安、失敗への不安につながっていると思われた。では、4年生のこうしたSEの認識の変化は何に起因するのか。SSの考察でも述べたが、ここでも臨地実習との関連は大きいと推察する。バンデューラ<sup>21)</sup>は、SEの認識に影響を与える要因として、4つの主要な影響力—制御体験、代理体験、社会的説得、生理的感情的状態—を挙げ、SEは自然発生的に生じるものではなく、これら4つの主要な影響力によって育てることができるとした。また、強力なSEを作り出す最も効果的な方法は、制御体験すなわち成功する体験であると提言している。

実践科学としての看護において、生の看護体験を基盤とする実習は、極めて有効かつ重要な学習の機会である。望月ら<sup>22)</sup>は、看護活動におけるSEと肯定的な実習体験とは有意に関連があり、肯定的な実習体験が積み重ねられることにより、SEがさらに高まる可能性があることを示唆する。ただ、看護学生が実習中に要求される知識・技術・態度は決して易しいものではなく、そうした中で成功体験を多く積み重ねることの難しさにも言及し、看護学生にとっての臨地実習は、そ

の場に適応するだけでも多くのエネルギーを必要とする上に、決して易しくはないさまざまな課題を克服しなければならない、常にストレスフルな環境下にあるとも指摘する。こうした点から考え、4年生の結果は、現在の臨地実習が学生のSEを促進する効果的な学習体験にはなり得ていないとの問題提起ともとれ、今後、山崎ら<sup>23)</sup>の報告を基礎にさらに検証を進め、学生のSEを効果的に高める教育的介入のあり方、特に看護学生の重要な学習の機会である臨地実習を効果的な学習の場にするための実習内容や方法の検討・改善が必要と思われる。

なお、本学看護学生のSEとSSにはやや高い相関が認められた。これについて、加賀谷ら<sup>24)</sup>は、SSを高めるには積極性を喚起する学習体験やSEを高める方法の検討が必要とし、望月ら<sup>22)</sup>は、SEが高まることによって意欲が高まり、それによって課題の達成が容易になるといった相乗効果を生み、さらに課題の達成や課題達成に向けた努力は、患者—看護学生間の対人関係を深めることにも繋がり、結果、看護に求められるSSも自ずと向上するとの見解を示した。このように、SEとSSは密接に関係する。宮沢ら<sup>20)</sup>は、SEと他の種々の個人的特徴との関係について、第1に、SEの高低は困難な場面に遭遇した時の行動の違いとなって表れ、SEが高いと抑うつ傾向に陥りにくく、問題解決行動に積極的に取り組み、困難を感じた時でも自分の意志、努力によって将来に展望をもつという時間的展望にも優れる<sup>25)</sup>、第2に、SEが高いと自分にかかわる出来事は自分でコントロールしているという自己統制感をもつことができ、特に自分の行動は努力や自己決定の結果であるとの意識が高く、何にでも努力しようとする態度がみられる、第3に、ストレスに対する対処行動の違いがみられ、SEが高いとストレスに直面した時に生じるストレス反応を軽減するような対処行動を積極的にとるようになる、と述べている。筆者らは、本学看護学生のSSについて、初歩的スキルや高度のスキルは備えているが、ストレス処理や攻撃処理のスキルの獲得は不十分と考察した。しかし、前述のSEとSSの関係から、SEの向上を図ることによりSSの獲得は可能とも考えている。ただ、こうした観点からSEとSSの関連を記述した研究は少なく、著者らにとっても今後の課題である。詳細なデータを集積し、両者の関係性についての明解な結論を導き出したい。加えて、SEを高める指導は、学生の準備状態が整っていない状況では効果的には作用しない<sup>26)</sup>との見解も示されており、SEの向上あるいは看護に必要なSSの獲得にむけた

効果的な教育方法の検討や指導の妥当性についての省察、また、学生の準備状態を適切に整えるための要件整備など、検討すべき課題は多い。

#### IV 謝 辞

本研究にあたり、調査にご協力くださいました西南女学院大学保健福祉学部看護学科1年生から4年生の学生の皆様に心より感謝申し上げます。



## 引用文献

- 1) 厚生労働省大臣官房統計情報部人口動態・保健統計課資料：平成13年人口動態統計の概況，2002
- 2) 鳴澤 實：フォーラムディスカッション「若者達と対人関係ストレス 一般大学の教育の立場から」. 日本看護学教育学会誌9(4)：42 - 45, 2000
- 3) 野崎智恵子, 千田睦美ほか：看護大学生の社会的スキル. 第30回日本看護学会論文集 (看護教育), 74 - 76, 1999
- 4) 布佐真理子・三浦まゆみほか：看護大学生の社会的スキル—1年間の生活体験と自己効力感との関連に焦点を当てて. 日本看護学教育学会誌. 8(2)：118, 1999
- 5) 道重文子：臨地実習が看護学生の社会的スキル形成に及ぼす影響. 日本看護研究学会雑誌. 20(3)：110, 1997
- 6) 三上れつ・小松万喜子：看護学生の対人関係スキルに関する基礎的研究. 第20回日本看護科学学会学術集会講演集. 258, 2000
- 7) 村上ヒトミ：看護学生がとらえる思いやりの概念と思いやり行動に影響する要因. 神奈川県立看護大学校看護教育研究集録. 25：68 - 75, 2000
- 8) 堂下芳美・八田朱美ほか：看護婦の社会的スキルと専門的自立度との関係. 日本看護研究学会雑誌. 21(3)：227, 1998
- 9) Bandura, A. : Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review. 84 : 191 - 215, 1977
- 10) 島井哲志編：現代心理学シリーズ15 健康心理学. pp.64 - 66, 培風館. 東京, 1997
- 11) 堀 洋道監修・吉田富二雄編：心理測定尺度集Ⅱ—人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉. pp.170 - 172, サイエンス社. 東京, 2001
- 12) 坂野雄二・東條光彦：セルフ・エフィカシー尺度 (上里一郎監修：心理アセスメントハンドブック所収). pp.478 - 489, 西村書店. 新潟, 1996
- 13) 菊地章夫：また／思いやりを科学する. PP. 185-207, 川島書店. 東京, 1998
- 14) 坂野雄二：一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討. 早稲田大学人間科学研究2：91 - 98, 1989
- 15) 千葉京子：看護学生の看護における社会的スキル—3年間の縦断調査—. 日本看護学教育学会誌 8(2)：119, 1999
- 16) 千葉京子：看護学教育における社会的スキルについての一考察. 日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要 (8)：134 - 139, 1995
- 17) 井山壽美子・宮脇美保子ほか：看護学生の社会的スキルと自己開示状況および教育方法の関連についての検討. 鳥取大学医療技術短期大学部紀要 (31)：53 - 58, 1999
- 18) 菊地章夫・堀毛一也編著：社会的スキルの心理学. 川島書店. 東京, 1994
- 19) Hildegard E. Peplau 著・稲田八重子ほか訳：人間関係の看護論. pp.1-15, 医学書院. 東京, 1992
- 20) 宮沢秀次・二宮克美・大野木裕明編著：自分でできる心理学. pp.72 - 75, ナカニシヤ出版. 京都, 2000
- 21) Bandura, A. (1995) Self-Efficacy In Changing Societies. Cambridge: Cambridge University Press. (アルバート・バンデューラ編, 本明寛監訳：激動社会の中の自己効力. pp.1-41, 金子書房. 東京, 2001)
- 22) 望月好子・石田貞代ほか：看護学生の看護活動における自己効力感—関連要因の検討. 東海大学短期大学紀要 (33)：103 - 107, 1999
- 23) 山崎章恵・百瀬由美子ほか：看護学生の臨地実習前後における自己効力感の変化と影響要因. 信州大学医療技術短期大学部紀要 (26)：25 - 34, 2000
- 24) 加賀谷聡子・布佐真理子ほか：看護の社会的スキルとキャリアおよび自己効力感との関連. 日本看護学教育学会誌12：103, 2002
- 25) 林 潔・瀧本孝雄：問題解決行動とself-efficacy, および時間的展望との関連について. 白梅学園大学紀要 (28)：51-57, 1992
- 26) 矢野理香・菅原邦子：学生の自己効力を高める前提となる要因の分析. 日本看護学教育学会誌 10(2)：173, 2000

## A Study on Nursing Student's Social Skills and Self-Efficacy.

Hideko Oda Kazunori Yakeyama Nariko Chuman  
Narumi Fujino Yuuko Ide Yuuko Wakizaki Yoshie Oota

### < Abstract >

The purpose of this study was to clarify the description of nursing students' social skills (SS) and self-efficacy (SE), and the relationship between SS and SE, and to exam the educational intervention method. We conducted a questionnaire survey with 369 undergraduate nursing students from the Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, in Seinan Jo Gakuin University. The average SS score for nursing students was higher than that of women college students except for the fourth year students. The scores for all six elements of SS for the fourth year students were lower compared to other groups. Moreover, for the skill of stress processing, the score was lower than other skills. There were obvious signs that students were not coping well with stress. The average score of SE for all grades was compared with the standard data of SE for comparable students. The strength of their SE was equal. However, for the fourth year students SE score was low, and there was a tendency for these students to underestimate themselves, lack self-confidence in achievement, demonstrate anxiety when approached, and exhibit fear of failure. In addition, there was a correlation between SS and SE, ( $R .63- R.79$ ) seen in all groups.

From this study, we found that progress in nursing students' SE, and examination of the educational method were effective for acquisition of SS which is indispensable to nursing practice. The reexamination of the educational contents for the four year nursing program at this university, and the improvement of our guidance for students with issues of SS and SE are subjects for further research.

Key Words : Nursing students, Social skills, Self-efficacy, Nursing basic education